

令和元年度 都城市立山之口小学校 学校評価報告書

評価 4:十分に達成 3:おおむね達成 2:努力を要する 1:取組内容の修正・変更を要する。

項目	重点指導項目	方策・手立て	成果と課題	総合	学校運営協議会委員の意見	委員の評価
豊かな心の育成	基本的な生活習慣定着・規範意識の醸成	○ あいさつや言葉遣い、廊下歩行など基本的な生活習慣の定着を図る。 ・ 「先に届く挨拶や会釈」と「右一静歩」	あいさつに関する職員評価（4段階）は2.7、保護者の評価も3.0である。昨年度に比較し、改善されてきている。これまで、児童には、機会あるごとに自分から先にあいさつをすることの大切さを指導してきたが、声が小さかったり、また誰にでもあいさつをしたりすることができないようだ。しかし、学校での繰り返し指導や登校時の朝のあいさつ運動、地域の見守り隊等の皆様のお陰で、あいさつに対する児童の意識が高まってきた。また、学校では会釈をする児童も増えてきている。廊下歩行については、教師の評価2.4と課題がある。けがの防止や規範意識を育てるために指導の徹底を図っていく。廊下歩行のやり直しをさせ、徹底して取り組む。「いつでも、どこでも、その場で指導」をモットーに全職員で指導していく。	3	7月の学校運営協議会でも話題になった挨拶の件であるが、1学期後半は、声が小さく、元氣のない児童が多く見られたが、学校の指導を通して改善が図られ、目標の「先に届く挨拶」ができるようになってきた。また、会釈をする児童も年々増えている。見守り活動をする方も、挨拶プラス声かけを行っている。また、地域の大人が子どもたちのお手本になることが必要だと思う。 これまでの道徳と「特別の教科道徳」では、どこがどう変わったのか、実際に授業を見た上で説明をしてもらうと分かりやすいと思うのでぜひ次年度は設定してほしい。	3
	児童相互の望ましい人間関係の醸成	○ 望ましい人間関係の醸成を図るために児童の人間関係の把握等、積極的な生徒指導を推進する。 ・ いじめ前段の早期発見と即時対応	友達との接し方に関する保護者の評価は3.4と高く、友達と仲良く親切にできていると考えている。また、学校においても、児童（毎月）及び保護者（年3回）にアンケートを実施し、友達関係の悩みや不安を担当が把握し、個別に教育相談をし、解決できるようにしている。これらのことにより、いじめ前段階の早期発見と即時対応ができていく。課題としては、特別活動や学級経営において、望ましい人間関係の醸成のための工夫・改善を図っていく必要があり、日常の取組が大切になる。			
	福祉教育や特別支援教育での心の教育推進	○ 人を思いやる心を育てるため、JRC活動や福祉体験、エコキャップ回収等を充実させる。 ○ 一人一人を大切に思いやる心の育成につながるよう特別支援学級の児童と通常の学級の児童との交流を推進する。	JRC活動、福祉体験、朝のボランティア活動等の職員評価は、3.1と高い。JRC活動では、エコキャップ回収、赤い羽募金（本年度14,378円）をすることで人を思いやる意識を高め、実践力が身に付いてきた。福祉活動では、第3学年の総合的な学習の時間において、外部講師を招聘して「認知症サポート養成講座」や「盲導犬学習」、「ひばり苑訪問」等を行い、福祉教育の充実を図った。また、山之口小伝統の「朝のボランティア活動」では、1年生から6年生まで、自主的に運動場に出て、草抜きや落ち葉拾いを行うことができた。 特別支援学級の児童と通常の学級の児童との交流では、人権教育の中核である他者理解、他者の人格の尊重を基本に、学級活動や道徳の時間の指導と関連付けながら、交流学習を推進することができた。			
	特別の教科「道徳」の研修の充実	○ 特別の教科「道徳」の研修を通して、実践的指導力を向上させる。	「特別の教科道徳」の授業改善に向けて研修会を年間4回実施した。そのうち研究授業を7月、10月に計3回実施し、授業後に研究会を行い意見交換を行った。また、通知表で保護者へのどのように伝えていくかについて道徳主任が資料の提供を行った。実践的指導力を向上させる研修となった。			
確かな学力の定着	研究的実践の日常化による学力の向上	○ 読解力を身に付けさせるための国語科・算数科の研究を通して、授業改善を行い、学力向上を図る。 ○ 学力検査（全国・県・CRT）を分析し、経年変化を見ることで、学年、学級の実態を把握し、対策を取る。 ・ 前年度比較によるCRT結果の向上	主題研究の時間に、全教科の土台となる読解力を身に付けさせるために、国語科と算数科の研究班に分かれ研修を深めた。全職員が研究授業を行い、その授業の中に読解力を高める手立てを設定し、手立ての有効性や課題について各班で協議を行った。また、3学期は研究授業を通して明らかになった手立てを共有し、実践化を図っていく。 全国や県の学力調査分析結果をもとに、学年、学級の実態や傾向を把握した上で、授業時間、学びの時間、学力アップタイムの時間に学習を行った。各学年、単元テストについては成果が出ているが、CRT検査においても結果が出るように、さらに工夫・改善を図る。	3	宿題への取組については、教師と保護者の評価に差がある。教師の側はまだ不十分だと思っているが、保護者は比較的しっかり取り組んでいると考えている。学習の見届けのところで、保護者と子どもたちの関わりが少ないことが考えられる。学校としては、その対策を考える必要があるのではないかと。 家庭学習でどのような宿題を出しているのか。例えば自宅では紙面を埋めればよい的なものになっていないか。また、児童の負担過重になっていないかを教師の側が把握していく必要がある。 本来なら、児童一人一人の習熟度も違うので、それぞれに応じた宿題が望ましいと思うが難しいのではないかと。宿題の内容、量等を学校で検討してほしい。 学ぶことが楽しいと思う経験をたくさん積んでいくのではないかと。読書についても読み聞かせを通して本の楽しさを伝えていきたいと思う。量だけでなく、感動などを感じる部分を大事にしていく必要がある。	3
	学習習慣と学習のきまりの指導の徹底	○ 児童の主体的な学習を実現するために、家庭学習を含む望ましい学習習慣と基本的な学習のきまりと学び方を定着させる。 ・ 宿題提出率100%	学習習慣に関する職員評価は2.7、保護者は3.1と指導の工夫・改善が必要である。学校では個別指導に力を入れ、家庭学習が充実するように引き続き家庭での見届けをお願いしていく。基本的な学習態度については2.5と課題がある。学習のきまり自体の見直しと共通理解・共通実践を図って行く必要がある。職員の意識改革が必要である。			
	基礎的学力向上のための家庭と学校の連携		日々の家庭学習の習慣化に関する保護者の評価は、3.1と高いが、職員評価は、2.9と保護者の評価より若干低い結果であった。個人差が大きいことに加えて、家庭学習の習慣が十分身に付いていない児童の割合が若干多いのが現状である。今後の課題としては、学習内容の質や効果的な学習方法等、各学年の発達段階に応じた取組の工夫をしたり、家庭との連携を図ったりする必要がある。			
	家読を含む読書活動の充実	○ 児童の読書を充実させるために、ハッピーデーを推進するとともに、家庭と連携し家読の啓発に努める。 ・ 年間貸出数2万5千冊達成	読書に関する評価では、職員が3.1、保護者が2.6と若干低い評価が出ている。本年度（12月24日現在）は100冊を突破した児童が5名であった。また、年間総貸し出し数が17,160冊と昨年度の目標20,000冊を超えるが、25,000冊の目標達成は厳しい状況にある。家読の充実を図るために、金曜日をハッピーデーとして貸出できる冊数を増やしたり、10月の読書月間で家族20分間読書をしたりして、読書に関する意欲を高めている。また、図書室のディスプレイを工夫したり、イベントを実施したりして図書室への来室者を増やしている。しかし、保護者の評価結果より、家庭での読書習慣は定着が不十分であるため、家庭と連携して家読をより充実していきたい。			

項目	重点指導項目	方策・手立て	成果と課題	総合	学校運営協議会委員の意見	委員の評価
たくましい体づくり	体力向上プラン等活用による体育科の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 体力テストの結果による体力向上プランを踏まえた体育科の授業やスポーツタイムの充実を図る。</li> <li>○ 基礎的な体力や運動技能の習得のために山之口小サーキットの活用を推進する。</li> </ul>	体力向上プランの実践について、職員評価は2.9、休日の外遊びについて、保護者の評価は3.2と昨年度に比べると若干高くなっている。特に体育の授業前にサーキットトレーニングを取り入れることを小中一貫教育山之口ブロックの共通実践事項としているため、筋力アップや平衡感覚、体幹を強くすることができている。さらに児童の体力を向上させるために、体育科の授業時間の運動量の確保やスポーツタイムの充実、そして保護者や地域と連携して、土日の外遊びを中心とした体力づくりについて、意識を高めていく必要がある。	3	「早寝早起き朝ごはん」については、家庭内のことなので保護者と連携していくことが必要ではないか。スマホやタブレット、ゲーム機等の利用の仕方も含めて、学校としては啓発のための取組を強めていく必要がある。また、PTAとしても約束事を決めるなど取組があるとよい。 安全に対する意識や態度は、子どもたちの幼児期からの遊び体験の不足に要因があると考えられる。学校でも低学年の段階は、体を使った遊びの体験の機会を意図的に増やすなど、体の動かし方や使い方を学ぶ場があってもよいのではないかと。 また、何のためにこの運動をするのかといった目的を指導する教師の側がもち、子どもたちに説明していくことが必要である。	3
	健康や安全に関わる基本的な生活習慣の定着	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 健康・安全に関わる基本的な生活習慣の定着のために、家庭と連携して「早寝・早起き・朝ごはん」の啓発に努める。 ・ 朝食摂取100%</li> <li>・ スポーツ振興センター対象児童10名未満</li> </ul>	「早寝・早起き・朝ごはん」について、保護者の評価は3.2と昨年度に比べると高くなっている。生活アンケートによると、朝ごはんはほぼ全員が食べているが、早寝については、テレビや音楽を見たり聞いたり、また、タブレットやスマートフォンでのゲームや動画視聴で就寝時刻が遅くなっているようである。その結果、早起ができず、睡眠不足になりがちである。対策としては、児童への指導に加えて、保護者への啓発や協力をさらに求める必要がある。			
	健診結果を活用した健康な体づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分の健康に対する関心を高めるために、健康診断後の治療率の向上に努める。 ・ う歯治療率70%以上の実現</li> </ul>	保健便りや対象者に手紙を出すなど機会あるごとに啓発を続け、むし歯の治療率は31%（12月末日現在）である。治療が終わらない児童が毎年固定化しているため、今後も更に個別の対応に努めていく。			
	弁当の日等を利用した食育の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 食に対する望ましい理解を深めるために「子どもが作る弁当の日」の実践の充実を努める。 ・ 「自分で作る弁当の日」実施100%</li> </ul>	職員評価3.1、保護者評価3.1と、遠足のときに取り組む3回の弁当の日が定着してきたと考えている。特に学年の発達段階に応じたお弁当作りの取組ができていた。実践記録を参観日に合わせて掲示するなどして、取組の充実を努めてきた。			
開かれた学校づくり	コミュニティ・スクールの整備・充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校と地域(住民)のつながりを強めるために、コミュニティ・スクール体制を活用し、学習支援・環境整備等のボランティアを充実させる。 ・ オープン校参加数昨年度の1.5倍増</li> </ul>	オープンスクールでは、学校運営協議会と連携し、地域住民の参加型のオープンスクールを本年度も実施した。本年度は地域に回覧文書を出したり、校区内の保育園や放課後サービス、中学校等々に案内を出して園の先生方にも参観していただいたりと、保護者の参観も含めると昨年度を上回る参加者数であった。アンケート結果では、大変好評であった。また、7月に民生委員児童委員との意見交換会、青井岳ボランティアのガイドによる第6学年「薩摩古道」第4学年「青井岳遠足」の実施等を行うことで、地域と一体となった教育活動を展開することができた。	3	コミュニティ・スクールの充実のためには、保護者の協力も欠かせない。地域と学校の連携、学習支援だけでなく、PTAの組織としての支援もその中に入ると、三者が連携し、より効果があがるのではないかと。	3
	一貫性・系統性・継続性のある連携教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 保幼小中の連携強化による一貫性・系統性・継続性のある指導の実現 ・ 保・幼・中との学習・生徒指導情報の共有体制確立</li> </ul>	小中一貫教育山之口ブロックでは、「知育部会」「徳育部会」「体育部会」「ふるさと教育部会」「特別支援教育部会」の中で共通実践事項を設定し、中学校卒業までの9年間を見据えた一貫した取組を行うことができた。幼小連携に関しては、夏季休業中に本校職員による各保育園訪問、3学期に園児と1年児童との交流会及び新入児童に関する保育園からの引継ぎを実施することで、小学校入学に向けたスムーズな移行ができるようにしている。			
	学校情報の発信	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校の教育方針や教育活動への理解を促進するために、文書・メール・ホームページ等の活用を努める。</li> </ul>	各種通信を保護者向けに発行し、児童に関わること保護者の取組等について、分かりやすく、しっかり伝えることができるように工夫した。また、ホームページを活用し情報発信を行った。緊急を要すること、児童の安心・安全に関わることに限っては、安心・安全メールを通して、保護者へ伝えることができた。			
	PTA活動・家庭教育学級の活発化	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 家庭の教育力向上や、生涯学習機会の提供のために、PTA各専門部活動活性化の支援に努める。</li> </ul>	家庭教育学級は5回実施することで、ねらいである「親としての教育的態度の育成」や「親子の交流を図る」ことができた。また、各学年で親子レクリエーションを実施し、ふれあいの機会の充実を努めた。PTA活動の充実については、収穫祭に伴い、バザー、豚汁、飲食物販売、写真販売と全役員が一人一役を担い、収穫祭を成功に導くことができた。今後の課題としては、学級懇談会や各種講演会等の出席率が低いので、保護者への啓発を行いたい。			